訃報

2012年12月28日に文化のみち二葉館（名古屋市旧川上貞奴邸）の主・貞奴さんのお孫さんにあたる川上初さんの訃報が当館に入りました。幼い日をこの「貞奴邸」で過ごした初さん。謹んでご冥福をお祈りいたします。

四季の移ろい 夏から冬へ

8/19（日）

講演と読みがたりと胡弓の調べ
朗読「注文の多い料理店」（宮沢賢治著）いのこ福代氏
胡弓 石田音人氏
講演 井上寿彦氏

10/20（土）

ステンド硝子アート制作無料講習会
初めての作業に戸惑いながらも、自分だけのステンド硝子アート制作を楽しみました。

11/3（土）

作家・広小路尚祈さんの講演「ダメ人間と文学」＆ブルース弾き語り

12/1（土）

木偶師・二代目萬屋仁兵衛「からくり三番叟・座敷からくり」の実演と講演が行われました。愛らしいからくり人形「茶くみ人形」、「からくり三番叟」などを間近で見ることができ、子どもから大人までからくりの魅力に引き込まれていました。

「歩こう!文化のみち」二葉館の前で「はち丸くん」と

文化のみち逍遥 その八

【名古屋市蓬左文庫】
名古屋市東区徳川町1001番地

尾張徳川家の旧蔵書を中心に和漢の優れた古典籍を所蔵する公開文庫です。

蓬左文庫の歴史は尾張藩の書物蔵である「御文庫」の創設にはじまります。元和二年（一六一六）、徳川家康の死去により、その遺品の多くが、尾張、紀伊、水戸の御三家に分譲されました。のちに駿河御譲本と呼ばれる家康の蔵書については、約三千冊が尾張家に譲られ、初代藩主義直は、これを基礎に、尾張藩の御文庫を創設しました。

御文庫の蔵書は、歴代藩主の書物収集を中心に、その規模を拡大し、幕末期の蔵書数は、五万点と推定されます。明治維新後、東京と名古屋の屋敷に保管されていた御文庫の蔵書をはじめとする尾張徳川家の蔵書に十九代当主徳川義親氏は、蓬左城（名古屋城）内にあった書物を伝える文庫という意味を込めて「蓬左文庫」と命名しました。義親氏は財団法人を設立して、伝来の大名道具や蔵書を財団の所有とし、昭和十年、名古屋大曽根邸内に徳川美術館が開館し、蓬左文庫は、東京目白の邸内に開館しました。

その後は、戦争により、十年足らずで、休館を余儀なくされますが、昭和二十五年、名古屋市に移管され、翌年から、旧尾張徳川家大曽根邸内の現在地において一般公開されています。

現在の蔵書数は、約十二万点。名古屋の城下図から世界図におよぶ古地図や、屋敷図・庭園図など二千枚をこえる絵図も所蔵しており蔵書内容の豊富さが蓬左文庫の特徴となっています。

蓬左文庫の蔵書は、閲覧室で閲覧できます。ただし、資料保存上、複製（プリントまたはデータ）があるものは、複製で、絵図などは、「古絵図データベース」から高精細画像でご覧いただいています。

徳川園全体が再整備された平成十六年の改築オープンにより閲覧室の充実とともに、蓬左文庫の展示室は徳川美術館の展示室と廊下でむすばれ、尾張徳川家伝来の大名道具と蔵書を合わせて近世武家文化をわかりやすく紹介する展示や、徳川美術館・徳川園と連携した講演会などを企画開催しています。

DATA 名古屋市蓬左文庫
■名古屋市東区徳川町1001番地
TEL 052-935-2173
■展示室　10:00～17:00
（入館は16:30まで）
■閲覧室のご利用／無料
（ただし館外貸し出しはいたしません）
閉架図書　9:30～12:00
13:00～17:00
開架図書　9:30～17:00

太正モダニズム建築の粋を見る ❻

大広間の円形ソファ、大型ソファ

高橋秀介さん

文化のみち二葉館の大広間には、座り心地の良い円形ソファと大型の二人掛けソファがあり、中のスプリング（バネ）は大正時代に貞奴邸が建てられた時のままのもので、外側は建物を復元した折に張り替えてあります。

その復元をした方が、東浦町の家具類内張工・いすや技研の高橋秀介さん（70）で、さまざまな産業分野で卓越した技能を持つ熟練者たちをたたえる「現代の名工」（2012年）に選ばれました。

その高橋さんはご自分の代表的な仕事に2004年に貞奴邸のソファを復元したことをあげてくださっており、その時の印象を尋ねると「大正時代の大きなバネに馬毛を使い、麻やヤシなどの天然素材を使う最後の大きな仕事だと思った。」と答えてくださいました。

復元、移築されてから何度か二葉館に足を運んでくださっているそうです。大型ソファも円形ソファもゆったり座れる憩いの場所となっているのは、高橋さんたち職人さんたちのお陰ですね。

書庫様から

昨年の11月22日の中日新聞、朝日新聞等に、「クレヨン王国」シリーズ（講談社　青い鳥文庫）で知られる児童文学作家・福永令三さんの訃報が載りました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

福永さんは1928年生まれで、東区長久寺町にお住まいでした。貞奴さんのお孫さんの川上初さんとは白壁小学校で同級生でした。そのようなご縁で文化のみち二葉館が開館してから2年目の春（平成18年3月21日（火）～5月7日（日））に企画展と講演会を開催いたしました。その時にインタビュアーをされたのが市川斐子さんです。

福永先生との思い出

数年前、二葉館で福永令三展が企画されたとき、打ち合わせのために熱海のご自宅にお邪魔しました。その折りに福永先生がいろいろとお話しされた内容で今でも忘れられないことがあります。

あの日、先生はたくさんの手紙を見せて下さいました。それは、これまでに読者の子どもたちから届いたファンレターでした。

「子どもたちから届いた手紙は全部保存してあります。子どもたちの手紙に励まされてクレヨン王国を書き続けてきました。読者の子どもたちこそが私の創作意欲をかき立ててくれたのです。文壇を気にしないで書き続けてこられたのは、子どもたちのお蔭なのです」

たくさんの手紙を見せて下さりながら、福永先生はとてもうれしそうにこのように語って下さいました。

その後で見せて下さったのは、古い長持でした。長持は横に置かれていたのでなく、縦に立てられていたのです。中を見て驚きました。先生の手書きの原稿が作品ごとに綴じられて全て保管されていたのです。長持の中は棚が付けられていて本棚のようになっています。奥様のご協力のもと、原稿が大切に大切に保管されていて感心しました。

展示期間中には、福永先生に二葉館にお越しいただきました。

そして、一階の大広間で公開インタビューをさせていただきました。今、振り返るととても楽しいうれしい思い出となりました。この日、子ども時代からのファンだという青年たちが四国などから参加してくださったことに驚きましたし、出席者が会場にあふれたこともうれしい限りでした。それから二葉館の玄関に、八時半頃から並んで待って下さっている方々に気づかれた福永先生が、歩み寄って丁寧にご挨拶をされたことも忘れられない先生のお姿です。

先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

郷土の文学研究会　市川斐子

熱海の自宅にて